

特集2：「ニュースメディアの信頼性を問う」―「再訪」の試み― 特集によせて

佐 幸 信 介*

「ニュースメディアの信頼性」は、新聞学研究所が開設された2007年に同様のテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムは、新聞学科の創設60周年の記念事業としても企画され、イリノイ大学からクリフォード・クリスチャンズ教授を招請して行われたものである。基調講演の詳細は、本研究紀要『Journalism & Media』第1号に収録されている。

前回のシンポジウムから10年、メディアをとりまく環境は、大きな変容を経験してきた。とりわけ、近年この信頼性の低下が指摘されるようになってきた。それは、たとえば公益財団法人新聞調査会をはじめ、さまざまな調査機関によって報告されている。また、国際比較調査においても、欧米先進諸国に比べて日本のジャーナリズムやメディアへの信頼性の高さが指摘されていたが、それも陰りをみせている。

ニュースメディアの信頼性問題は、産業としてのマスメディア、あるいは媒体そのものの存立・継続可能性の問題とも関連している。マスメディアがニュースを独占的に担う、これまでのメディア・システムがすでに自明のものではなくなっている。このような構造的な信頼性の低下傾向に対して、SNSやWebなどを含めたインターネットの影響が指摘されている。しかし、信頼性問題をこのようなメディアテクノロジーの進展に集約して説明することには慎重になる必要がある。2016年以降顕著に争点化した、「フェイクニュース」「オルタナティブニュース」「ポスト真実」についても、「信頼」を問うことなく言及することは無意味であるように思われる。

そもそも「信頼」とはどのようなものとして、ニュースメディアの条件となっていたのか。ニュースの信頼性とニュースを発信するメディアの信頼性との関係が、メディアの当事者にとって、あるいはオーディエンスにとっても確かなものとして共有できない状況に、私たちが直面しているとすれば、共有できない状況に対してどのように学問的にアプローチをすべきなのか。ジャーナリズムやメディア研究に携わるものとして、問われるべきなのは学問的な言説である。つまり、現象としての信頼性と同様に、それと向かい合う言説の信頼性もまた問われなければならない。

このような問題意識にもとづいて、2017年12月16日にシンポジウムを開催した。大井眞二氏（本学教授）による基調報告の後、徳山喜雄氏（立正大学文学部教授）、山口仁氏（帝京大学文学部准教授）、小林義寛氏（本学教授）が加わりパネルディスカッションを行った。本特集では、4氏の報告と問題提起の内容を収録している。詳細は、後掲する論考に譲りたいが、シンポジウムは多角的にアプローチをすることを意図した。ジャーナリズム研究からの大井氏の基調報告では、ニュースメディアの信頼についての認識と方法論が提示され、議論のテーブルが提示されている。それに対して、徳山氏からはジャーナリズムとその活動の実践的場面から信頼性の現実的かつ倫理的な問題が提示された。政治社会学を専門とする山口氏からは、構築主義的アプローチからメデイ

*さこう しんすけ 日本大学法学部新聞学科 教授

アの相互関係・交渉のなかで信頼性が構築される過程が示された。小林氏からはメディアが構成する現実のなかに、ニュースをめぐる言説が内向していることそれ自体が問題視され、ニュースメディアが現実を統合していくプロセスに焦点が当てられた。それに対し、A. シュッツやW. ジェームスの多元的現実論が対置された。

今回のシンポジウムでは、このように多様な立場からの議論が行われた。『ジャーナリズム&メディア』第11号に収録するにあたり、議論をいたずらに収斂させるのではなく、わたしたちが直面している信頼性を問う作業のきっかけとなり、この問題の議論を継続していくための場となれば幸いである。